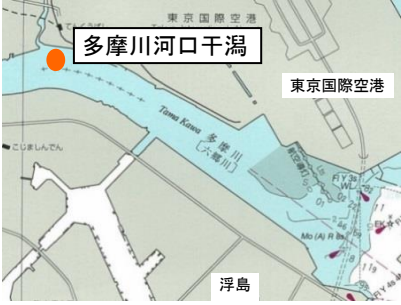
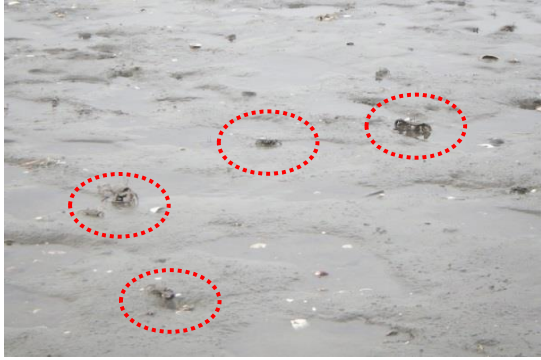
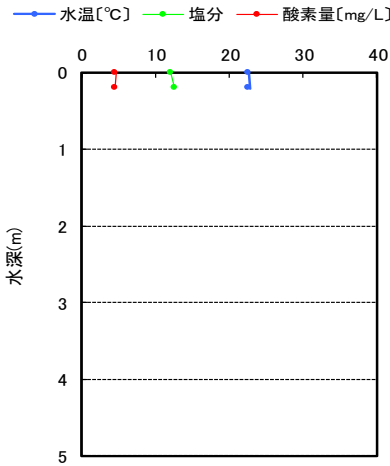
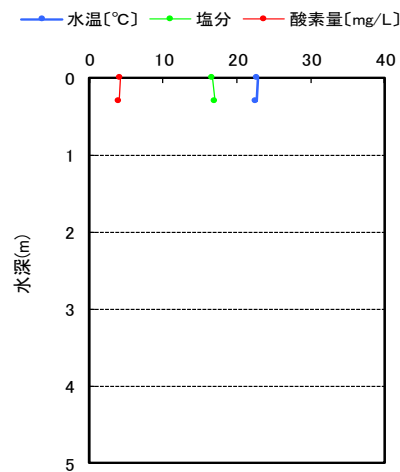


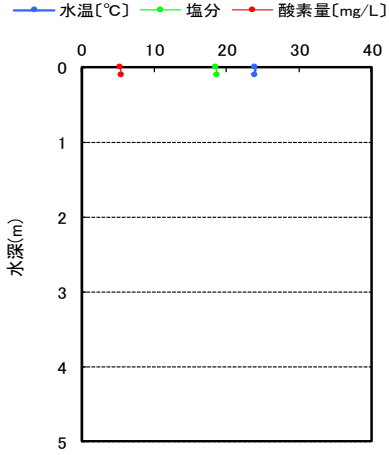
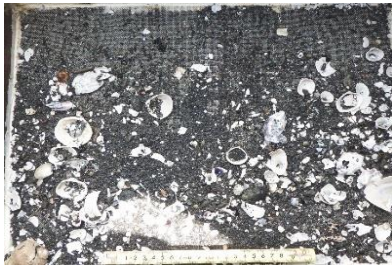
東京都内湾水生生物調査

地点名	多摩川河口干潟	調査年月日	令和元年6月3日	8:10	～	8:59
<調査地点> 		<底質状況、底生生物出現状況>   多摩川左岸側(東京都側)の海老取川河口付近の干潟で調査を行った。調査地点の陸側で護岸工事が行われていた(鋼矢板が設置されていた) 底質はシルト(柔らかい泥)が混じった砂であり、臭いはなかった。  干潮時、じっと息をひそめて観察していると、多数のヤマトオサガニが巣穴から出てきた。 ※写真のスケール1目盛:1mm				
 水温[°C] 塩分 酸素量[mg/L] 水深(m)		 ふるいがけ 底土をふるっている状況。底質はシルトが混じった砂で、あっという間に1mm目合の網目を抜けてしまう。 ※写真のスケール1目盛:1mm  ヤマトシジミ フルイ上には貝殻片が多く残った。その中にヤマトシジミが埋もれていた。  ムロミスナウミナナフシ 体長2cm程。細長い円筒状の体をしており、白地に褐色の斑紋がある。干潟の表層部に巣穴を掘って生活する。				
 ヤマトシジミ 殻長4cm程になる。河口干潟など淡水の影響の強い、砂底から泥底に生息する。日本産シジミは3種類いるが、食用として最も馴染み深い種である。多摩川河口干潟では、様々な大きさのヤマトシジミが採取され、新規加入した稚貝もみられた。		 ヤマトシジミ  ヤマトオサガニ 甲幅4cm程になる。柔らかい水分の多い泥干潟に斜めの穴を掘って巣穴を作る。巣穴の入り口には放射状の浅い溝ができる。				

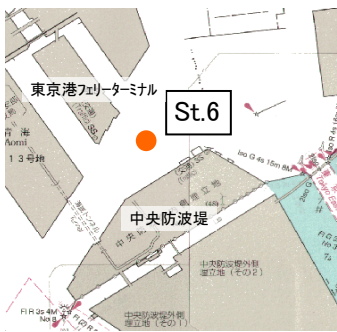
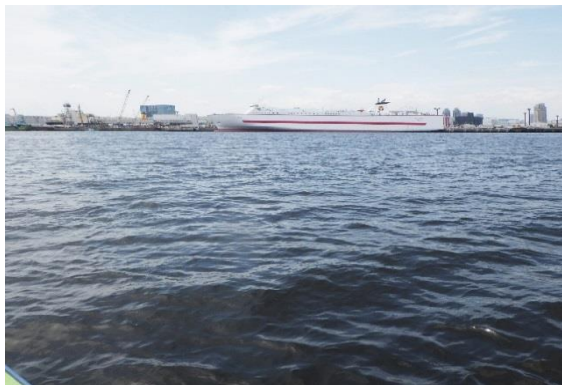
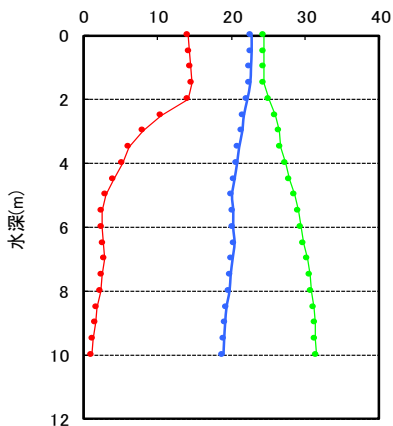
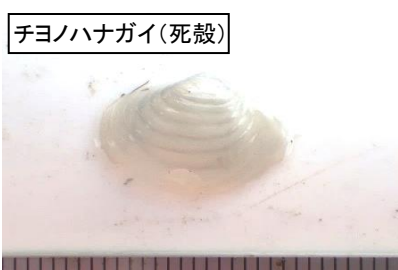
東京都内湾水生生物調査

地点名	St.31(多摩川河口)	調査年月日	令和元年6月3日	9:12 ~ 10:04
<調査地点>		<底質状況、底生生物出現状況>		
				
		多摩川河口から1.5km付近の浅場であり、干潮時には川の中に立ち込むことができる程浅い。調査時の水深は40cmであった。		
		 		
		底質はシルト混じりの細砂で、臭いはなかった。フルイ上には、貝殻片が残った。		
※写真のスケール1目盛:1mm				
				
テッポウエビ メス オス 卵		アナジャコ 体長5cm程で、砂泥底やアマモ場に巣穴を掘り、雌雄つがいですんでいる。大きい方のハサミを打ち鳴らすと、パチンと大きな音がする。写真は、それぞれオスとメス。採取されたメス個体は卵をもっていた。 全長9cm程になるが、採取された個体は幼体である。砂質から砂泥質の干潟に2mにも達する巣穴を掘り、その中で生活する。		
		 		
アサリ(稚貝) 殻長4cm程になる。潮干狩りなどで盛んに獲られている代表的な二枚貝。東京湾のものは形が細くて、模様のコントラストが強いものが多い。稚貝のみ採取された。		ヒメシラトリ 殻長3cm程になる。淡水の影響の強い内湾奥の泥底に深く潜って生息している。水管を出して海底上の堆積物を吸い取って食べる。 カガミガイ 殻長7cm程になる。採取された個体は稚貝。殻は白色で殻質はやや厚い。内湾の干潟から水深20mの砂泥底にやや深く潜って生活する。		

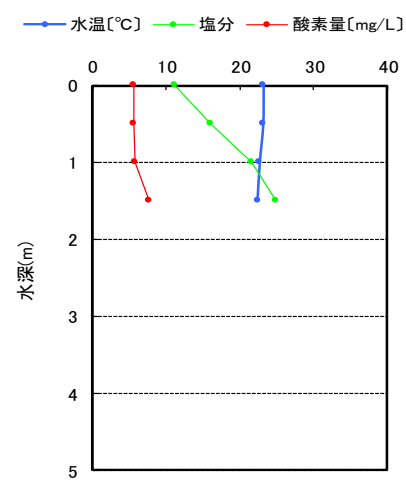
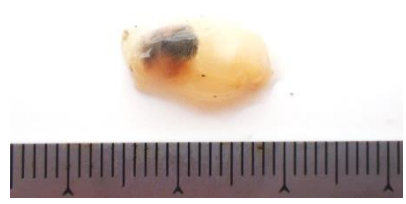
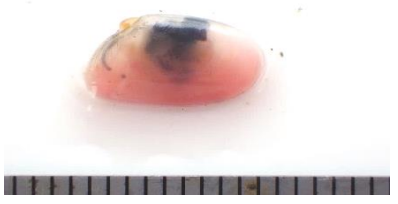
東京都内湾水生生物調査

地点名	森ヶ崎の鼻	調査年月日	令和元年6月3日 10:35 ~ 11:26
<調査地点> 		<底質状況、底生生物出現状況>   羽田空港の北側に残された干潟。干潮時でも周りには「海」に取り囲まれているため、歩いて入ることはできない。  春の大潮の干潮時には、普段見ることのできない広い干潟が出現する。 ※写真のスケール1目盛:1mm	
水温[°C] 塩分 酸素量[mg/L] 		フルイ上には、貝殻片が多数残った。  ホトギスガイ  大きなものは殻長3cm程になるが、2cm程のものが多い。干潟から水深10mの砂泥底に生息する。写真のように互いに足糸を絡ませて、泥の表面をマット状に覆うことがある。 ミスヒキゴカイ  砂泥干潟や浅瀬の海底に潜り、細い糸のような鰓と触手を水中に伸ばしていることが多い。名前の由来は、鰓と触手を水引(祝儀袋等に用いられる飾り)に見立てたもの。	
<周辺状況> ヤマトシジミ  ※解説は、多摩川河口干潟を参照。 多摩川河口干潟だけでなく、本調査地点でも生息が確認された。		サルボウ  殻長5cm程になる。潮下帯から水深20mまでの砂泥底に生息する。よく類似する種にアカガイがあり、両種は殻の表面の筋の数で区別する(アカガイ42本、サルボウ32本)。	
		ホンビノスガイ  殻長10cmを超える大型種。北米原産の外来種で、殻は白色。東京湾の湾奥の泥底やカキ礁周辺では多くみられる。食用となり、スーパーでも目にする。	

東京都内湾水生生物調査

東京都市計画局 水質調査課	調査年月日	令和元年6月3日	13:10 ~ 13:54
地点名	St.6		
<調査地点>		<底質状況、底生生物出現状況>	
			
東京港フェリーターミナル St.6 中央防波堤 中央防波堤内側 埋立地 (その1) 中央防波堤外側 埋立地 (その2)		東京港フェリーターミナルの正面で採泥を行った。航路であるため、水深は11.0mと深い。海底付近の酸素量は1.3mg/Lと貧酸素状態(2.9mg/L以下※)となっていた。 ※出典: 貧酸素水塊速報	
— 水温[°C] — 塩分 — 酸素量[mg/L] 			
水深(m)		フルイ上には、貝殻片と植物片が僅かに残った。	
		※写真のスケール1目盛: 1mm	
底質の性状は、シルトであった。海底面は酸素があるため、表面の泥は灰色であったが、泥の中は酸素が少ないため、黒色であった(還元状態)。			
採取物 		シノブハネエラスピオ 	
水深が深く、海底が軟泥であるため、軽めで取り回しのよい採泥器を使用。底泥が満杯で上がってくる。		3対の鰓がある。ハネエラスピオの仲間は日本では4種類が知られ、本調査ではこれまでシノブハネエラスピオとスベスベハネエラスピオの2	
ムラサキイガイ(死殻) 		チヨノハナガイ(死殻) 	
本調査地点では、多くの死殻が採取された。特に多かったのが、ムラサキイガイとチヨノハナガイである。ムラサキイガイは、東京湾では代表的な付着生物で、港湾の防波堤等に高密度に付着する。チヨノハナガイは、殻長1.5cm程の二枚貝で、貧酸素水塊でも酸素がある期間に短期的に発生することが知られている。			

東京都内湾水生生物調査

地点名	三枚洲(荒川河口)	調査年月日	令和元年6月3日	12:06 ~ 12:56
<調査地点> 		<底質状況、底生生物出現状況>  荒川と旧江戸川の河口に残された天然の浅場。調査時の水深は1.8mあり、大潮の干潮時でも干出ししない。すぐ横は、東京ディズニーリゾートである。		
 水温[℃] 塩分 酸素量[mg/L] 水深(m)		 フルイ上には、多数の貝殻片が残った。		
 スミス・マッキンタイヤ採泥器 水深が浅く、海底の表面が固いため、重量のある採泥器を使用した。それでも、1回に採取できる底土は、軟泥の地点に比べて少な		※写真のスケール1目盛:1mm クチキレガイ  殻長15mm程の整った円錐形の巻貝。殻はやや厚く、殻の色は灰白色から黄白色である。潮通しのよい砂泥底に生息する。 キセワタガイ  体長4cm程で、内湾奥の干潟周辺から水深100mの砂泥底に生息する。一見、貝殻が見あたらないため貝とは違う生物に思えるが、半透明の薄い半球状の貝殻が内在する。肉食性でアサリなどの二枚貝を食害する。 サクラガイ  殻長20mm程の長卵形。桃色の殻が特徴的。内湾の干潟から水深30mの砂泥底に生息する。近年、各地で個体数の減少傾向が報告されている。 チロリ属  体長10cm程になる。4つの鋭い牙(顎)がついた吻(ふん)を『チロリ』と出して、干潟の小動物を捕らえる。写真の個体の吻は、体内にしまい込まれている。		